

ヨハネによる福音書 9:1-12；「見る目」第1部 – 2026年10月12日

I. 歓迎と振り返り

A. おはよう！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。

1. 初めてお越しの方や、オンラインで視聴されている皆様、ようこそ。

B. 歌を通して、そして今、御言葉の学びを通して、主を賛美し礼拝するために皆さんと共にここに集まれることは、なんと大きな祝福だろう。

C. さて、学びに入る前に、小学生の子供たちを日曜学校の教室へ送り出そう。

1. 子供たちが教室へ向かう間、残りの皆さんは聖書を開き、ヨハネによる福音書第9章の箇所を開いてほしい。

D. 先週は、イエスが「まことに、まことに、あなたがたに告げる。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』のだ」と宣言した箇所、第8章を終えた。

1. イエスは、ご自身がアブラハムよりも先に存在し、偉大なる「ワレワレ」——始まりも終わりもない、永遠に自存するお方、アルファでありオメガであり、肉となった全能の神——であることを、大胆に宣言されたのだ。

2. そしてイエスがこの大胆な宣言をしたとき、ユダヤ人たちはイエスの言わんとしていることを正確に理解し、すぐに石を拾ってイエスに投げつけようとした。

a. 彼らにとって、イエスが自らを神であると主張することは冒涇とみなされ、律法によれば、主に對する冒涇の罰は石打ちによる死刑であった。

3. しかし、聖書には、イエスが身を隠し、彼らの真ん中を通り抜けて神殿から出て行き、そうしてその場を通り過ぎたと記されている。

4. イエスは、石打ちにしようとするユダヤ人たちの群衆心理を、何らかの奇跡的な方法でかわし、彼らの間を通り抜けて神殿から出て行った。先週、この脱出が、ヨハネの福音書全体を通して読んできた、神の究極のタイムラインに関するテーマの一つをどのように裏付けているかについて触れた。イエスが逃げられたのは、まだその時が来ていなかったからであり、イエスの時はまだ来ていなかったのだ。

E. さて、今朝の聖書箇所は第9章の記述を引き継ぎ、イエスが神殿を出て、神殿へと続く道の一つを通り過ぎていった際に何が起きたかを詳しく語っている。

1. 今朝の聖書箇所は、ヨハネによる福音書第9章1節から12節だ。そして今日の学びは、実際には複数回にわたるものになるだろう。2回に分けることになるのか、3回に分けることになるのかは定かではないが、確かなのは、この章全体を一度の集会で読み終えることはできないということだ。

a. この学びのために私が選んだタイトルは「見る目」だ。そして、これは第1部であり、「目が見えるようになった盲人」に焦点を当てている。

2. さて、第9章全体が同じテーマを扱っている。この章全体は、盲人の癒やしと、その癒やしの後に起こった出来事を中心に展開している。

a. 流れを途切れさせないために、この章を一度にすべて取り上げたいという誘惑もあったが、章を急いで読み飛ばしてしまい、主がこの物語を通して私たちに語ろうとしていることを見逃さないよう、分割することにした。

3. そこで、今日は主にその男の癒やしについて扱っている、この章の最初の12節までを学ぶことにする。来週は、主の御心があれば、この物語を再開し、癒やしの後に起こった出来事について考えていきたい。

F. 皆さんも、もうヨハネによる福音書第9章を開いていることを願っている。もしそうなら、神と神の聖なる御言葉を称えるために、できる方は全員、立ち上がってほしい。

1. 私は自分の聖書から本文全体を読み上げるので、皆さんも自分の聖書でできるだけ追いかけてほしい。

2. この福音書を記した「愛する弟子」ヨハネは、第9章1節で次のように記している。（R & P）

II. はじめに；

A. 今日の話は、宗教指導者たちがイエスを処刑しようと石を手にとった中、イエスが神殿を出る途中で癒した盲人についてのものだ。

1. イエスは神殿を出ようとしており、弟子たちと共にいた。すると、人々が神殿へ行き来する道沿いで物乞いをしていた盲人の男に出くわした。

B. そして、彼らが通り過ぎようとしたとき、イエスはこの盲人に目を留めた。イエスは彼を見たのだ。

1. その日、神殿へ行き来する人々の多くが間違いなく素通りしたであろう男。道端の風景の一部となっていたに違いない男。ほとんどの人が気にも留めないような男だ。それにもかかわらず、イエスは彼を見たのだと記されている。

2. ここでの「見る」というギリシャ語は「エイドン」だ。これは「見る」を表す一般的な単語である「ブレポ」ではない。「エイドン」という動詞には、単に目で見ただけでなく、その状況を理解し、洞察するという意味が含まれている。

3. イエスがこの盲人を見つめたとき、イエスは彼の状況を把握していた。イエスには、彼の状態に対する洞察、つまり深い理解があったのだ。そこで、イエスは立ち止まり、彼に注意を向けた。

4. さて、この男は生まれつき盲目だった。福音書の記録の中で、先天的な状態について具体的に述べられているのは、これが唯一の事例である。

a. 『使徒行伝』には、生まれつき特定の病気や奇形、あるいは疾患を抱えている人々の事例がいくつか記録されているが、福音書の記録の中で具体的な症例が言及されているのは、これが唯一である。

5. 生まれつき目が見えないこの男は、光が何であるか全く知らない。青い空や緑の草、あるいは太陽の輝きについて、何の知識も概念も持っていない。

6. 彼は太陽の暖かさを感じるが、それがどのようなものかという概念は持っていない。彼は生涯を、完全かつ徹底的な暗闇の中で過ごしてきたのだ。

- C. そして、イエスが弟子たちにこの男とその状態について少しは話していたに違いないと推測される。なぜなら、2節で弟子たちがこの男とその状態について質問しているからだ。
1. おそらく、この男とその話は、エルサレム中の町中で知れ渡っていたのだろう。彼は人生のほとんどを道端に座って過ごしていたのかもしれないし、イエスや弟子たちも以前、彼のそばを通り過ぎたことがあるかもしれない。しかし、今回は違った。イエスは彼の中に何かを見出し、足を止めたのだ。
 2. ファリサイ派の人々が、イエスを処刑しようと石を手にとったばかりだったことを思い出してほしい。イエスは彼らの目の前から逃げ出したが、彼らが追いかけてこないという保証はなかった。それにもかかわらず、イエスは逃げ続ける代わりに立ち止まり、生まれつき目の見えないこの男に引き寄せられたのだ。
 3. そして、イエスがこの男を見つめている間、弟子たちはこれを好機と捉え、イエスに神学的な質問を投げかけた。

D. 冒頭の聖句をもう一度見てみよう。

III. ヨハネによる福音書 9章1-2節；

- A. イエスが生まれつき目の見えないこの男に目を留めたとき、弟子たちはその機会を利用して、神の報いに関する神学的な質問を投げかけた。
1. 彼らはこう尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき盲目なのは、彼自身の罪か、それとも両親の罪か。」
- B. さて、彼らの問いは、あらゆる種類の病気、疾患、奇形、障害、および／または不調は、罪の直接的な結果であるという考えに基づいていた。つまり、もし誰かがそのようなものに苦しんでいるなら、それは罪のせいであるというのだ。
1. この点について、少し時間を取って皆さんと話し合いたいと思う。
 2. 親の罪が子に受け継がれるという考えには、二つの重要な真実があるため、一定の説得力がある。
 - a. 一つは、本質的に、あらゆる病気、あらゆる疾患、不完全なものはすべて、実際には罪の結果であるということだ。
 - i. 罪のゆえに……死、破壊、奇形、病気、障害、そしてあらゆる不完全なものがこの世に入り込んだのだ。私たちは墮落した世界に生きており、完全ではないもの、完璧ではないものはすべて、罪がこの世に入り込んだ結果である。
 - ii. しかし、原罪と個人の罪は異なる。そして、ここで弟子たちが語っているのは原罪ではなく、親や子供自身の個人的な罪のことだ。したがって、この考え方はここでは当てはまらない。
 - b. この考えに一定の説得力があるもう一つの理由は、子供は親から学ぶからだ。
 - i. 親が示す手本は、しばしば子供に影響を与え、その成長に作用する。
 - ii. それは良い手本でもあれば、悪い手本でもある。人々が親の足跡をたどることで、罪は世代から世代へと受け継がれることがある。

3. こうした真実があるため、罪が世代から世代へと受け継がれるという教えは、一世紀において非常に有力なものであった。それはある程度聖書に基づいていたが、おそらく聖書に対する偏った見方、つまり不均衡な見方に基づいていたのだ。説明しよう。
 - a. 旧約聖書には、神が父の不義を子孫の三代目、四代目まで報いると語る箇所がいくつかある。出エジプト記20章5節、出エジプト記34章7節、民数記14章18節、申命記5章9節、エレミヤ書32章18節。これらすべてがこのことを述べている。
 - b. しかし、これらの聖句のそれぞれは、神を、何千人もの者に慈愛を示し、不義と過ちを赦し、神を愛し、その戒めを守る者たちに豊かな憐れみを示すお方として描いている。
 - c. だからこそ、バランスを保たなければならない。聖句の一部を過度に強調して、もう一方を無視してはならない。バランスの取れた姿勢を貫かなければならない。
4. 神は、他者の罪や義に基づいて人々を霊的に裁くことはない。いいや、一人ひとり、自らの行いに基づいて霊的に裁かれるのだ。
 - a. エゼキエル書において、神は次のように述べて、このことを極めて明確に示している。「見よ、すべての魂はわたしのものである。父の魂も、子の魂も、すべてわたしのものである。罪を犯す魂は死ぬ。しかし、もし人が義であり、法にかなった正しいことを行い……もし彼がわたしの定めを歩み、わたしの裁きを忠実に守ったなら、彼は義であり、必ず生きる！」と主なる神は言われる。（**エゼキエル18:4-5, 9**）
 - b. その後、20節で主はこう述べている。「罪を犯す者は死ぬ。子は父の罪を負わず、父も子の罪を負わない。義人の義は彼自身に歸し、悪人の悪は彼自身に歸する。」（**エゼキエル18:20**）
 - c. すべての人は、自分の義または悪に**基づいて霊的に裁かれる**ことになる。聖書はこの点について極めて明確である。
5. しかし、当時のラビたちは異なる教えを説いていた。彼らは、罪に対する罰が世代から世代へと受け継がれる可能性があると教えた。彼らは、胎内の赤ん坊でさえ罪を犯し得ると信じ、そう教えていたのだ。
 - a. 胎内での罪だ。彼らは、ヤコブとエサウが母リベカの胎内で互いに争っていたと記された創世記25章22節のような聖句を根拠にしようとした。（**創世記25:22**）
 - b. 彼らは、これが胎内での罪の証拠だと示唆した。ヤコブとエサウが胎内で互いに争ったり、格闘したり、戦ったりしていると記述されていることから、胎内で罪を犯し得る証拠としたのだ。とんでもない話だ。しかし、それは当時のいくつかのラビによって教えられていたことだった。

- c. これは聖書から教えられていることではない。実際、使徒パウロはローマ人への手紙の中で、神の選びについて語り、まだ生まれておらず、善も悪も何も行っていないヤコブとエサウが、神のみによって選ばれたと述べている。[ローマ9:11]
- d. したがって、彼らが胎内での罪の証拠として私たちについて考えていたことさえ、事実ではなかった。パウロは、胎内にいる間、ヤコブもエサウも善も悪も何も行わなかったと教えている。
6. したがって、赤ちゃんが親の罪の責任を負わされるという考えや、胎内で犯された罪の責任を赤ちゃんが負わされるという考えは、聖書の教えと一致しない。
7. 弟子たちが「この人が生まれつき盲目なのは、彼自身が罪を犯したからか、それとも両親が罪を犯したからか」と尋ねたとき、彼らの問いは誤った神学に基づいていた。
8. 誰かが先天的な欠陥や病気、奇形、あるいはその他の何らかの病気を抱えて生まれたからといって、それが自動的に個人の罪の結果であるとは限らない。
- a. 私が「自動的に」と言うのは、実際には、ある種の罪が特定の子供の発達上の問題に影響を与えることがあるからだ。
- i. 薬物依存症の母親が妊娠中に薬物使用を続けた場合、その子供に特定の発達上の問題が生じる可能性がある。
- ii. アルコール依存症の母親が妊娠中に飲酒を続けると、赤ちゃんは身体的、構造的、神経学的、認知的、行動的、および／または感情的な様々な課題に直面する可能性がある。
- iii. その意味で、赤ちゃんは親の罪の影響を受けることはあるが、その罪によって霊的に裁かれることはない。彼らは母親の誤った選択による身体的な結果に直面するが、神は彼らを霊的に裁くことはない。
9. なぜ私がこの話題を取り上げ、これほど多くの時間を割いてこの考えについて語るのか。それは、このような考え方が今日でも依然として広く浸透しているからだ。今でも、苦しみは罪の直接的な結果だと考える人々が存在する。何か悪いことが起これば、それは罪のせいだと。確かに、その可能性はあるが、それが唯一の説明ではない。
- a. ヨブのことを思い出す。ヨブはあらゆる種類の苦しみ、あらゆる種類の痛みと苦悩を経験した。そして彼の友人たちは、すべての苦しみは罪の結果であり、それが神の裁きの現れであると信じているという点で、弟子たちと同じ誤った神学に従っていた者たちだった。
- i. ヨブの友人たちは彼のそばに寄り添いながら、彼を罪で非難し、ひどく傷つけるような言葉を浴びせた。それは彼には当てはまらないことさえあった。彼らはひどい友人だった。
- ii. ヨブの苦しみは、彼の人生における罪の結果ではなく、サタンが彼を打ちのめそうとした結果だった。サタンは、ヨブに神を呪わせ、神を見捨てさせようとしていたのだ。
- b. そしてサタンは今もなお、人々に神を呪わせ、神を見捨てさせようと働いている。人々に神を疑わせ、神から背を向けさせようとしているのだ。様々な状況を利用して現実を歪め、あたかも神こそが

すべての悪いことの責任を負うかのように見せかけるのだ。しかし実際には、それはサタンの仕業であり、墮落し罪深い世界に生きている結果なのだ。

- c. ほら、私たちの多くが痛みや苦しみを経験してきたことは分かっている。私たちは困難や試練を乗り越えてきたのだ。
- d. 今朝ここにいる皆さんのうち、今まさに何らかの困難や大きな試練に直面している人もいるかもしれない。
- e. 敵は、それが私たち自身の行いのせい、つまり私たちの人生における罪のせいであり、神が私たちを裁いているのだと思わせようとする。しかし、それは私たちが仕える神ではない。神はそのようなやり方で働かれることはない。敵が耳元で嘘を囁くのを許してはならない。苦しみや困難は、必ずしも罪と直接関係しているわけではない。関係している場合もあるが、すべての苦しみがそうだと決めつけることは、聖書の教えに真っ向から反する。
- C. さて、説教はこれくらいにして、本文に戻ろう。3節を見てほしい。そこでは、イエスが弟子たちの誤った神学を即座に正している。3節。

IV. ヨハネ9:3；

- A. イエスは非常に明確に述べている。これは個人的な罪や、罪に対する裁きといった問題ではなかった。この男が生まれつき盲目であるという状態は、両親の罪とも、彼自身の罪とも何の関係もなかったのだ。
1. これは罪に対する神の罰ではなく、神がこの男の中に、そしてこの男を通してご自身を現すための機会だったのだ。
2. 神がこの男を生まれつき盲目にさせたのは、いつか彼を癒やすためだと言っているわけではない。神はこの男を、イエスが彼を実例として用いるために、暗闇の中で一生を過ごし、イエスを待ち続けるよう強制したわけではない。私たちが仕える神は、そのような神ではない。
- B. なぜこのようなことが起きたのかは、私たちには明かされていない。イエスは、なぜ神がこの出来事を許されたのかを説明しようとはせず、単に神がそれを通してどのように働かれるかを述べているだけだ。
1. 神は、私たちが直面する様々な状況や環境を、ご自身の栄光のために用いることができる。力強い方法で御自身を私たちに現すために。神は私たちの困難に制限されることなく、むしろそれらを通して輝きを放たれるのだ。
2. 状況の原因は重要ではなかった。イエスは彼らの注意を原因からそらし、神が力強い方法で働かれるための機会へと向けさせたのだ。
3. そして、私たちの苦しみや試練においても、同じことが言える。**特定の状況の原因**に焦点を当てるのではなく、神が力強い方法で御自身を現すための機会がそこに与えられていることを考えるべきだ。
- a. 神は私たちの苦しみを用いて、一人ひとりの内側で偉大な御業、すなわち私たちを成長させ、信仰において成熟させるための善き御業を成し遂げることができる。
- i. ローマ人への手紙5章は、「私たちは、苦難を誇りとすることができる。苦難は忍耐を生み、忍耐は試練に耐える力を生み、試練に耐える力は希望を生むことを知っている

からだ』と述べている（ローマ5:3-4）。

- ii. ヤコブはこう教えている。「さまざまな試練に遭うとき、それをすべて喜びとみなせ。信仰が試されることで忍耐が生まれることを知っているからだ。[そして私たちは

忍耐にその完全な働きを成し遂げさせなければならない。そうしてこそ、私たちは完全に欠けるところのない者となるのだ。」（ヤコブ1:2-4）

iii. また、ローマ人への手紙は、「神を愛する者たち、すなわち、神の御計画に従って召された者たちにとっては、すべてのことが共に働いて益となる」と教えている。（ローマ8:28）

b. 神は、私たちの苦しみを用いて、同じような状況にある人々を助言し、励ますことができる。
i. 神は、私たちが同じ苦しみを経験している他の人々を慰めることができるように、私たちの苦しみの中で私たちを慰めてくださるのだ。

ii. パウロは『コリントの信徒への手紙二』の中で、次のように記している。「私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみの父、すべての慰めの神を賛美しよう。神は、あらゆる苦難の中で私たちを慰めてくださる。それは、私たちが神から受けた慰めをもって、あらゆる苦難にある人々を慰めることができるようにするためである。」（IIコリント1:3-4）

c. 神は、私たちの苦しみを用いて、他者の心の硬さを打ち破り、その人に変化をもたらすことができる。

i. 他者の苦しみをきっかけに信仰を持つようになった人々を知っている。神はそれらの出来事を通して、彼らの心を和らげ、ご自身を現し、神を必要としていることを気づかせたのだ。

ii. あなたにも、同じような経験をした人々を知っているかもしれない。信仰を貫き通した他者の心の痛みや困難を通して、信仰を持つようになった人々だ。

d. 神は、私たちの苦しみ、あるいは苦しみの中での忍耐を、他の信者たちにとっても励みとなる模範として用いてくださる。

i. 私たちが大きな困難に直面しながらも主を賛美し続けるとき、それは周囲の人々に影響を与える。私たちが心の痛みや困難の真っ只中で主を賛美し続ける姿を見ることで、彼らも同様に賛美する勇気を得るのだ。

ii. これこそが使徒パウロの証しだ。彼は神への信仰ゆえにあらゆる苦難を経験し、私たち全員の模範となっている。私たちは彼の忍耐を見て励まされ、それに倣おうという気力を得るのだ。

4. ですから、次に苦しみに直面したとき、私たちの焦点は「神よ、なぜこんなことをされるのか」ではなく、「神よ、この状況を通して何をなさりたいのか」「どのように私の中で、そして私を通してご自身を現そうとされるのか」であるべきだ。

a. これは罪の問題ではなかった。そこが焦点ではない。焦点は、なぜ神がこれをしたのかというのではなく、神がこれを通して何ができるのかということにある。

C. 本文を読み進めよう。4節と5節を一緒に見てみよう。

V. ヨハネによる福音書9章4～5節；

A. ここでのイエスの答えからは、ある種の切迫感が伝わってくる。

1. イエスは神の業を行わなければならない。それがイエスの目的だった。父の御心を行い、父がイエスに託した業を成し遂げることだ。

a. これは、ヨハネの福音書第6章でイエスが以前に語ったことである。「わたしは天から下って来たのは、自分の御心を行うためではなく、わたしを遣わした方の御心を行うためである。」（ヨハネ6:38）

b. 他に選択肢はなかった。これこそがイエスの願いであり、目的だった。父の業を行い、父の御業に専念すること。

2. そしてイエスは、まだその時間があるうちに、これらの業を成し遂げなければならなかった。

a. イエスが「まだ昼の間は、業をなさなければならない」と言われるとき、それはイエス自身の「日」、すなわち地上での時間を指している。イエスの時間は終わりに近づいていた。6ヶ月も経たないうちに、イエスは十字架にかけられ、世の罪のために死ぬことになる。イエスは十字架にかけられ、復活し、その直後に父のもとへ昇天し、こうして地上の宣教を全うするのだ。

b. 「来る夜」とは、イエスの地上の働きの終わりを指している。

c. したがって、時間は極めて重要だ。イエスは神の定めた時系列に従って行動しており、その時間は終わりに近づいている。イエスは、まだこの地上でできるうちに、御父の業を行わなければならないのだ。

3. イエスは、この世にいる限り、ご自身が「世の光」であると述べている。できるうちに、明るく輝かなければならないのだ。この盲目の物乞いのような人々は暗闇の中にいる。イエスは、暗闇に迷うこの世に御自身の光を照らすために来られたのだ。彼らに御自身を現し、人々を御自身のもとに引き寄せるために来られたのである。

B. イエスの切迫した姿勢と、ご自身の時間が限られているという認識を思うとき、私たちも同じように行動するよう励まされるはずだ。

1. イエスに、御父の御業を行うための「その日」、すなわち独自の機会があったように、私たちにもそれがある。私たちの日が終わり、夜が訪れるまでの時間は限られている。そしてイエスとは異なり、私たちは自分の「日」、つまり自分の時間がいつ終わるかを知らない。あとどれだけの時間があるのかも分からない。いつ夜が訪れるのかも分からないのだ。

2. 人生は誰にも保証されていない。今日はここにいても、明日はいなくなるかもしれない。私たちの人生はただの瞬間の霧に過ぎない。このことを悟ることで、私たちは父の御業を行うことへの切迫感を持つべきだ。

a. 私たちは自分の計画や自分の行いを練ることに多くの時間とエネルギーを費やしているが、父の御業、すなわち神の御業に、どれほどのエネルギーと努力を注いでいるだろうか。

3. 聖書は、**時を贖うよう**私たちを励まし、促している。この地上での時間を有意義に過ごすこと。一時的なことだけでなく、永遠のことに関与することだ。

a. パウロはローマ人への手紙の中でこう書いている。「時を知って、こうしなさい。今こそ、眠りから覚めるべき時である。なぜなら、私たちの救いは、最初に信じた時よりも、今やもっと近づいているからだ。夜はすでに過ぎ去り、日は近づいている。それゆえ、闇の行いを捨て去り、

光の武具を身に着けよう。昼のように正しく歩み、酩酊や酒宴、不品行や情欲、争いや嫉妬にふけることなく。むしろ、主イエス・キリストを身に着け、肉の欲望を満たすための備えを一切してはならない。」（ローマ13:11-14）

i. 教会の家族よ、我々は本腰を入れなければならない。時間は刻々と過ぎている。夜はすでに深く、日は近づいている。過ぎゆく日々は、主のために証し、主の御業に従事する機会が終わりに近づく日々なのだ。

ii. 私たちは闇の行いを捨て去り、この世の事柄とは一切関わりを持たず、イエスを身にまとい、肉のために何の備えもしてはならない。

b. エペソ人への手紙5章にはこう記されている。「だから、どのように歩むべきか、よく注意しなさい。愚かな者ではなく、賢い者として歩み、時を大切にしなさい。なぜなら、今は悪の時代だからである。」（エペソ5:15-16）

i. この真理を私が改めて指摘する必要はないだろう。「この時代は悪である」ということだ。時間は残り少ない。私たちはイエスと共に歩むにあたり、切迫感を持つ必要がある。

c. 私たちが、時を大切に、時を悟る者となれるように。時間が貴重であり、過ぎ去る一日一日が、神の御業を行うために神に用いられる日が一つ減っていくことだと、私たちが悟れるように。

4. イエスには切迫感があった。私たちもそうあるべきだ。

C. 本文を読み進めよう。6〜7節を一緒に見ていこう。

VI. ヨハネ9:6-7；

A. ここには、イエスが盲人を奇跡的に癒やした詳細が記されている。イエスは地面に唾を吐き、その唾で泥を作り、それを男の目に塗りつけ、まるで「油を注ぐ」かのようにし、その後、シロアムの池へ行って泥を洗い流すように命じたのだ。

1. この記述を読み、その光景を想像してみると、イエスの行いがどれほど奇妙なものかと思わずにはいられない。実際に、それがどのような光景だったのか、あるいはどのように行われたのかをじっくり考えてみると、本当に奇妙だ。

2. イエスは土に唾を吐き、「粘土」、つまり「泥」を作った。そして、それをその男の目に塗りつけたのだ。皆さんはどうか分からないが、私は雨の日にスポーツをしたことがあるので、目に泥が入る感覚はよく知っている。決して気持ちの良いものではない。

a. 通りすがりの人々の中には、イエスが盲人の目に泥を塗りつけるのを見て、どう思った者がいただろうか。これは大失敗に終わる可能性も十分にあった。

3. さらに、この男が盲目だという点を考えてみよう。目に泥が入った状態で、イエスはシロアムの池に行って洗うように命じた。しかし、イエスは彼をそこへ連れて行くとは申し出なかった。それがどんな状況だったか想像できるだろうか。目が見えない男が、誰かが目に泥を塗りつけたせいで、

誰かが目に泥を塗ったせいで、一度も見たことのない場所へたどり着こうとする姿が想像できるだろうか。奇妙な話ではないか。

4. まあ、詳しい経緯は語られていないが、その男はなんとか池までたどり着き、顔を洗い、癒やされたのだ。

B. ここで私が指摘したいのは、イエスが癒やしを行った手段が奇妙であり、また多様であったという事実だ。

1. というのも、福音書全体を通して、イエスは他の盲人たちも癒やしているが、その方法は多岐にわたっていたからだ。

a. マタイによる福音書第9章には、二人の盲人がイエスに向かって「ダビデの子よ、私たちに憐れんでください！」と叫んだことが記されている。イエスは家に入り、二人の盲人はイエスの後を追った。イエスは彼らに言った。「わたしにそれができると信じるか。」彼らは言った。「はい、主よ。」そこでイエスは彼らの目に触れ、「あなたがたの信仰どおりになるように」と言われた。すると、彼らの目は開かれた。（マタイ9:28-30a）

i. こうしてイエスは、目にただ一度触れただけで癒やしたのだ。

b. マルコによる福音書第10章には、イエスがバルティマイという名の盲人を癒したことが記されている。イエスがエリコの町に入られたとき、盲人のバルティマイが「ダビデの子よ、私を憐れんでください！」と叫んでいた。おそらく彼は、他の二人の盲人が癒された話を聞き、自分も「ダビデの子よ、私を憐れんでください！」と叫べば癒されるのだと考えたのだろう。

i. 「イエスは答えて彼に言われた。『私に何をしてほしいのか。』すると、盲人は言った。『ラッポニ、目が見えるになりたいのです。』そこでイエスは彼に言われた。『行きなさい。あなたの信仰があなたを癒したのだ。』すると、彼はたちまち目が見えるようになり、道でイエスに従った。」（マルコ10:51-52）

ii. ここマルコによる福音書では、イエスはその男に触れることさえせず、ただ言葉を語っただけで、その男は癒やされた。

C. マルコによる福音書第8章には、イエスが癒したもう一人の盲人の話が記されている。イエスがベツサイダの町に来ると、盲人がイエスのところに連れて来られ、人々はイエスに、その人に触れてくださるよう懇願した。

i. おそらく彼らは、以前癒やされた他の二人の盲人の話を聞いていたのだろう。人々は、ただ触れてもらえば治ると考えていた。しかし、イエスはここでも全く異なることをされた。

ii. この男の場合、イエスは実際に彼に触れ、それから彼の目に唾を吐いた。

iii. イエスが唾を吐きかけ、彼に触れた後、「何か見えるか」と尋ねると、その男は「人が木のように見えるだけだ」と答えた。

iv. そこでイエスは再びその目に手を置き、彼に上を見上げるように命じた。すると、彼は視力を取り戻し、皆をはっきりと見ることができた。（マルコ8:25）

2. イエスが盲人を癒した四つの異なる記述がある。ここヨハネの福音書では、目に少量の唾と泥を塗ったものであり、マタイの福音書では、たった一度の

触れることによるものだった。マルコでは、イエスは言葉によって癒やし、またマルコでは、唾とイエスによる二度の別々の触れ合わせを組み合わせた方法だった。

3. そこで自然と疑問が湧く。「なぜイエスは毎回、異なる方法で癒やしたのか？」その答えは、イエス自身よりも、むしろ私たちに関係しているのだと思う。
- a. なぜなら、イエスは、もし毎回同じ方法で行えば、私たちが「癒しの鍵は特定の方法に従うことにある」と考え、その方法を体系化してミニストーリーにしてしまうことを知っていたからだ。
- i. もしそれが「言葉」によるものだったなら、私たちは「言葉」を通して神の奇跡的な癒やしを謳う信仰癒やしの奉仕を展開するだろう。私たちは「信仰の言葉」運動を築き上げるだろう。
- ii. もしそれが「一度の触れ」によるものなら、私たちは「按手」のミニストーリーを発展させ、ただ人に手を置けばその病が癒されると信じるようになるだろう。
- iii. もし、唾を吐き、触れて、さらにまた触れるという複数の段階からなるプロセスであれば、こうした多段階のプログラムを確立するだろう。「唾を吐き、触れ、そして再び触れるという、私たちの3段階の癒しのプログラムに参加してください」と。
- iv. もしそれが泥によるものなら、私たちは土を軸とした奉仕活動を展開し、もともと私たちは地の塵から造られたという事実を踏まえ、原点とのつながりの必要性を説くだろう。そして人々に自然と触れ合い、その方法で神が癒しをもたらすようにと招くだろう。
- b. 私たちは、神を粹にはめ込み、神が働かれる方法を制限しようとしてしまいがちだ。「ああ、こうでなければならない、あるいはああでなければならない」と言い、神を理解し、神がどのように働き、どのように働かないかを定義できると思い込んでいるのだ。神は、私たちのどんな粹にも収まることはない。神はご自身が適切だとお考えになる通りに働かれる。神は、ご自身が望む方法で御業を成し遂げられるのだ。
- c. そして、私たちに、神に「それはできない」などと言う資格があるだろうか。神は神なのだ。神は望むことは何でもできる。
- d. 神は**様々な人々を通して、様々な方法で**働かれる。神があなたの人生でどのように働かれるかは、私の人生で働かれる方法と全く同じではないかもしれない。だからといって、どちらの働きが他より優れているわけでもなければ、神が人の中でどのように働かれるかに基づいて、ある人を他の人より愛しているわけでもない。神は主権者であり、創造的である。神には、ご自身が適切と見なす方法で私たちの中に働かれる力があるのだ。神を制限しようとしたり、神を粹にはめようとしたりしてはならない。神はその粹には収まらないし、それはただ無駄な努力に終わるだけだ。

C. 本文に戻ろう。8節と10節と一緒に読もう。

VII. ヨハネによる福音書9章8～9節；

A. これらの節では、盲人が癒される前から彼を知っていた近所の人々や地元の人々の反応について記されている。

B. そして、当時何が起きていたのかを想像してみると、非常に興味深い。

- 8節には、「近所の人々、以前彼が盲目だったのを見ていた人たちは、『この人は、座って物乞いをしていたあの男ではないか』と言った」とある。
- 9節では、「ある人たちは『この人だ』と言った」。
- また、9節には「ある人たちは『この人だ』と言った」とある。
- 9節の終わりに、「彼は『私がその人だ』と言った」とある。
- 10節では、「そこで、彼らは彼に『どうして目が見えるようになったのか』と尋ねた」とある。

C. これらの「言った」という語句は、いずれも未完形（直説法）で書かれている。つまり、それは終わりの兆しもなく延々と続いた過去の行動を描写しているのだ。

- つまり、近所の人たちは「この人は、座って物乞いをしていたあの男ではないか」と言い、それを何度も繰り返し言い続けたということだ。
- ある者は「この人だ」と言い続け、またある者は「いや、この人ではない。ただ似た者だ。あり得ない」と言い続けた。
- そして、盲人自身も繰り返し言い続けた。「いや、私だ。私がかつてここで物乞いをしていた盲人だ。私だ、本当に、本当に私なんだ。」
- それに対し、人々は絶えず尋ねた。「では、どうやって目が見えるようになったんだ？ 教えてくれ、教えてくれ！」

D. つまり、これは実に驚くべき光景だ。人々は呆氣にとられている。視力は完璧なのに、自分の目を信じられないのだ。彼らは圧倒されていた。

- 「これがあの男なのか？」「まさか、本当に？」「ああ、彼だ。」「いや、ありえない。あいつがずっとそこに座って物乞いしているのを見てきたんだ。同じ男であるはずがない！」
- この光景が想像できるか？ここで何が起きているのか、目に浮かぶだろうか？そうあってほしい。なぜなら、これは極めて重要な点だからだ。
- 私たちの人生においても、こうあるべきなのだ。イエスが私たちに触れてくださる時。イエスが私たちの中に御自身を現し、私たちが霊的にイエスによって癒やされる時。
 - 人々は私たちの生活を見て、そこに**劇的な変化**があることに**気づく**はずだ。その変化は、人々が見て驚かされるほど大きなものでなければならない。
 - 人々があなたの人生を見て、「あなた、クリスチャンなんだね！」「わあ、すごい！」「まさか？」と言うだろう。そして他の人たちは、「そう、本当だよ、彼は自分の人生を主に捧げたんだ」、「神様は彼の人生の中で素晴らしい御業をなしておられる」と言うだろう。
 - そして人々は感動し、願わくば、これらの人々と同じ場所にたどり着き、私たちに「どうしてそうなったの？」「もっと教えて、イエスがあなたの人生にどう触れたのか知りたい」と尋ねてくるだろう。

- d. そうすれば、私たちは彼らに神の愛や神の恵み、そして神が私たちの人生にどのように働いてくださったか、また神が彼らの人生にも同様に働きかけたいと切に願っておられることを分かち合う機会が与えられるだろう。

4. それが、私たち全員に対する私の願いだ。イエスが私たちの中でなされる働きが、私たちをこれほどまでに変え、その結果、私たちの周りの人々が、神が私たちの人生の中で、そして私たちを通してなされたことに驚嘆するようになること。そして、キリストにある私たちの希望を他の人々と分かち合う機会が与えられることだ。

E. さて、最後の数節を見て、今日の集いを締めくくろう。11節と12節と一緒に見てみよう。

VIII. ヨハネによる福音書9章11～12節；

A. 人々はそれがどのようにして起こったのか知りたがり、その男は自分が知っていることを忠実に語った。イエスという名の男が泥を作り、それを彼の目に塗り、シロアムの池で顔を洗うように言ったこと。そこで彼は言われた通りにし、目が見えるようになったのだ。

1. さて、私が興味深いと思うのは、その男が、イエスが唾液を作るために地面に唾を吐いたという事実を省略しているという点だ。
2. その出来事が起きた時、彼は盲目だったため、そもそもイエスがどのようにして泥を作ったのか全く知らなかったのだ。奇跡がどのように起こったのか、正確には見ていなかった。完全には見ていなかったからこそ、それを完全に説明することはできなかったのだ。
3. そして、この点も注目に値すると思う。時には、私たちもこの盲目の物乞いと同じような状態になることがある。神が私たちの人生において驚くべき御業をなされたこと、あるいは奇跡さえもなされたことを知っている。しかし、それを完全に説明することはできないのだ。
4. 「どうなったのか」と尋ねられたとき、私たちはしばしばこう言わざるを得ない。「正確にはどうなっているのか分からない。ただ、それが機能していることは分かっている。神が私の中で、私が完全に説明できないような働きをしてくださったことは分かっているだけだ」と。
 - a. 私の人生において、そしておそらくあなたの人生においてもそうだろう。私たちが確実に知っているのは、主なしでは絶望的に迷い、暗闇の中で生きていたが、ある日イエスが私たちに光を照らしてくださったということだけだ。
 - b. 誰かが私たちに福音を伝えてくれたとき、それが心にずっと響いた。突然、すべてが理解でき、神が私たちの中に御自身を現してくださったのだ。私たちは赦しを必要としていること、救い主を必要とする罪人であることを理解し、信仰によってイエス・キリストの福音という良き知らせを受け入れた。
- C. そうすることで、私たちは罪の罰から洗い清められた。闇から引き出され、光の中へと導かれたのだ。

私たちは神の家族に迎え入れられ、キリストと共に相続人となった。キリストの義をまとい、キリストを通して永遠の確証を与えられた。聖霊が臨み、私たちの内に住まれ、私たちの体は聖霊の宮となった。
- d. 神は私たちを義と認め、御自身の御前で義人であると宣言された。神は私たちを罪の束縛から贖われた。神は私たちを御自身と和解させ、私たちは神との平和に入った。神は私たちの過去、現

在、そして未来の

罪を赦してください。神は私たちの非難と罪悪感を取り除いてください。神は私たちを新しい被造物としてください。神は私たちを闇の王国から救い出し、御自身の栄光の王国へと導いてください。神は私たちをキリストと結びつけ、キリストの死が私たちの死となり、キリストの命が私たちの命となるようにしてください。神は私たちをキリストの体の中に置き、互いに一員として結んでください。神はこれらすべて、そしてそれ以上のことを成し遂げてくださったのだ。

- e. 正直なところ、私が初めて救われた時、神がこれらすべてを行っておられるとは全く知らなかった。当時はそれらのことを説明することすらできず、今でも、それらがどのように機能しているのかを正確に説明するのは難しい。
- f. ただ、それらが確かに起こっていることだけは分かっている。これら様々なことをどう説明すればいいのかは分からない。しかし、これだけは分かっている。「かつて私は迷っていたが、今は見出された。私は盲目だったが、今は見える。」
- g. キリストが私たちの中に御自身を現してくださる前、私たち皆は人生のある**時期、あの盲人と同じだった**。すべてを完全に説明することはできないが、イエス・キリストを信じたその瞬間に、それらのことがすべて起こったと、信仰によって信じ、信頼しているのだ。

B. さて、群衆は反応し、イエスがどこにいるのかが知りたがっている。その出来事が起きた時、その男は盲目だったため、全く見当がつかなかった。彼は「知らない」と答えた。

- 1. 来週、主の御心があれば、イエスがこの目が見えるようになった盲人にご自身を現わしていく過程を見ていくことになる。
- 2. 当初、イエスは単に「イエス」という名の男に過ぎず、その男の目に泥を塗り、「洗ってきなさい」と言い、彼の人生に癒やしをもたらしていただけだった。しかし物語が進むにつれ、この男がイエスとその正体について理解を深めていく驚くべき過程を目撃することになるだろう。
- 3. それは驚くべき理解の進展であり、私もこの点を解説することを楽しみにしている。しかし、物語の続きを知るには、来週またここに来てほしい。今回は12節で締めくくり、神が私たちの中に、そして私たちを通して、周囲の世界に御自身を現し続けてくださるよう祈ろう。祈ろう。